宮沢賢治の理想とした食と職（第一部）

翻訳・著述家（ヴィーガン）
加藤 明

人はどう生きるべきか、と考えるような哲学的・宗教的傾向を持った人物であれば、当然、生命の糧としての**食**、その食糧を得るための**職**というものに、真正面から向き合わざるを得なくなります。人生の土台である「**食**と**職**」を蔑ろにして、そもそも哲学や宗教など、ないのであります。賢治は、この「人はどう生きるべきか」「人は何を**食**べ、何を**職**とすべきか」という、人生における最も基本的な命題に真摯に向き合い、人々にも作品を通じて問題提起しました。

賢治は、19歳で盛岡高等農林学校に入る頃までは、食に頓着することはなかったようですが、〈**盛岡高等農林学校時代（19〜21歳）**〉で後述するように、この時期の「ある体験」が切っ掛けで、それ以降次第に、純粋な植物食を理想と考えるようになったようです。ただ、その後も時折り、「天ぷらそばのエビを食べていた」という証言があるとか、手紙に「まぐろのさしみを数切たべた」というような記述があるということで、賢治は菜食者ではなかった、と思い見做しておられる方もあるよう

です。けれども、その行為の内実や心中を仔細に調べてみるならば、決して動物食の肯定者ではなかった、むしろ、「**すべてのいきもののほんたうの幸福**」を実現するために、植物食は不可避の一大事である、と考えていたことが、納得されるでありましょう。また、職業についても、そのような食事観を持つと期を同じくして、その植物食を生み出す農業を、最も神性な職業と考えるようになったように思われます。

賢治は、そうした信念があったればこそ、完璧ではなかったにせよ、率先して食改善の範を垂れると共に、植物食の供給者である農民の生活改善や意識改革に貢献しようと志し、自ら農民となる選択までしたのでありました。そして、『**蜘蛛となめくぢと狸**』『**よだかの星**』『**注文の多い料理店**』『**ビヂテリアン大祭**』『**フランドン農学校の豚**』『**二十六夜**』『**なめとこ山の熊**』『**氷河鼠の毛皮**』など、食や殺生をテーマにした物語を次々と書いて、世の人々にも「**食と職**」についての一考を促したのであります。

以下、第一部では、特に彼の思想と「**食と職**」の変遷に注目しつつ「**賢治の生涯**」を見てゆくこととし、第二部では、「**賢治の悟り**」と題して、賢治の思想的神髄について言及することに致します。

（賢治に影響を与えたと思われる組織名・人物名・書籍名、また、賢治が執筆した童話や詩の題名、教典類からの引用文、その他の重要語句などは、**太字**にしてあります。）

第一部　賢治の生涯

〈出生から小学校時代まで（～12歳）〉

宮沢賢治（1896–1933）は、1896年（明治29年）8月27日に、現在の岩手県花巻市豊沢町の地に、**宮沢政次郎**と**イチ**の、長男として生まれました。賢治に続いて、**トシ**、シゲ、**清六**、クニが生まれています。